

西南学院グリークラブの百年

河野 正海

2019（令和元）年9月、西南学院グリークラブは創立百周年の記念すべき大きな節目を迎えた。私達はこの百周年をより意義あらしめるために、「百周年記念事業」として以下のような行事を行った。

1. グリークラブ百年の歩み展 9/2～10/19 百年館企画展示室
2. グリークラブ創立百周年記念式典 9/21 大学チャペル
3. グリークラブフェスティバル演奏会 9/22 アクロス福岡シンフォニーホール
4. グリークラブ創立百周年記念レセプション 9/22 西日本新聞会館
5. グリークラブ創立百周年記念誌「百年の歩み」発刊 2022（令和4）年10月

そこで記念誌「百年の歩み」の概要や、西南学院の歴史の中でグリークラブが辿ってきた歩みを記述してみたい。



2019年9月22日アクロス福岡で行われたグリークラブフェスティバル演奏会

1. グリークラブの誕生

西南学院の創立から3年後の1919（大正8）年、本学に着任したアメリカ・南部バプテスト派宣教師 S.F.フルジュム¹のもとに歌の好きな中学部の学生たちが集まり、チャペルサービスを目的として声楽の指導を仰いだ。その学生たちの中には、後に西南学院教授を務めた河野博範²や伊藤俊男³らが含まれていた。ミス・フルジュムがグリーの指導を始める以前にも、学院には何らかの形で合唱団は存在していたが、本格的にクラブ活動としての形を為したのはこれが最初であった。同時にこの新しいクラブの部長として活動を支えたのが、後に西南学院院長を務めた水町義夫⁴であり、水町部長は出来立てのコラスグループに「グリークラブ」の名称を与えた。創設時の西南学院グリークラブの組織体制は、後に西南学院院長を務めた G.W.ボールドン⁵を顧問に部長水町義夫、声楽指導ミス・フルジュムそして部員10人程でのスタートであった。

1921（大正10）年4月の西南学院高等学部新設により、中学部のグリーのメンバーは殆どが高等学部へ進学したためグリークラブも高等学部へ引き継がれた。グリー創設メンバーの一人である井上精三⁶はグリーの中に「西南弦楽四重奏団」結成の行動を起こし、以降グリーの活動はストリングオーケストラ主体の音楽団体となった。翌年には正式に器楽部を設立したために、学友会音楽部に所属する「グリークラブ」の中に声楽部と器楽部の二つが同居した。この器楽部が後々「西南学院管弦楽団」結成の源流に繋がった。

1922（大正11）年10月に福岡市記念館で開催された「西南学院グリー倶楽部秋季大演奏会」は、地方の音楽会としては大きな反響を呼び、九州各地から演奏旅行の招聘が相次いだ。このように大正時代のグリークラブはストリングオーケストラが主体の活動で、グリーが本格的に声楽部としての地位を確立したのは、1928（昭和3）年のことである。

1 S.F.フルジュム（Sarah Frances Fulghum）：アメリカ・南部バプテスト派宣教師、中学部で英語と音楽の教師、第4代舞鶴幼稚園園長。

2 河野博範：1926年高等学部神学科卒業、1931年高等学部文科卒業、西南学院大学英文学科教授、第3代短期大学部長。

3 伊藤俊男：1925年高等学部文科卒業、中学校長、高等学校長を経て第10代西南学院院長。

4 水町義夫：1912年東京帝国大学文科卒業、当時は中学部長、西南学院高等学部教授を経て第4代西南学院院長。

5 G.W.ボールドン（George Washington Bouldin）：アメリカ・南部バプテスト派宣教師、西南学院高等学部神学科長を経て第3代西南学院院長。

6 井上精三：1925年高等学部商科卒業、NHK福岡放送局。

2. 戦前のグリークラブ

1928（昭和3）年4月グリークラブは声楽部と器楽部を分離し、名実共に合唱団としての地位を確立した。10月には再興グリーとして4回目の演奏会を福岡で、12月には5回目の演奏会を久留米で開催した。折から満州事変が勃発、不安定な世情の中で1934（昭和9）年7月に第1回定期演奏会を開催。1941（昭和16）年には太平洋戦争が始まり、世の中は戦時一色となり音楽活動は極めて困難な情勢ではあったが、グリーは1943（昭和18）年まで9回の定期演奏会を継続して開催した。そしてこれが戦争只中における最後の演奏会となった。

3. 生きて再び

学徒出陣等が決定した1943（昭和18）年7月、グリーは第9回の定期演奏会を西南学院講堂（現大学博物館）で開催した。戦時下のことで「空襲警報発令時の対応」等をプログラムに記しての開催であったが会場は満員の聴衆であふれた。ステージの大きな日の丸を背に演奏会は井上良助⁷の指揮で始まった。この演奏会のラストステージは、グノーの歌劇「ファウスト」の抜粋「兵士の合唱」であった。当時の『西南学院新聞』⁸に当日の様子が詳細に記されているが、『暫しの拍手鳴り止まず、追加された曲目チェコスロバキアの軍歌「戦線へ」には又も絶讃の拍手が送られ、斯くして十時近くに非常なる盛況裡に幕を閉じた。』とある。

この演奏会は卒業生にとっては最後であっても、グリーにとっても最後の演奏会となることを誰が予想したであろう。演奏会が終わると誰言うこともなく日頃練習していたピアノを囲み、あれこれと歌い出し最後に再び「兵士の合唱」を歌った。最後の演奏会のピアノ伴奏に急遽駆り出されたのが福永陽一郎⁹であったことも、後々のグリーにとって因縁めいた関わりであった。卒業生達は互いに手を取り合い、涙を流しながら、いつの日か再び「兵士の合唱」を歌いたいものだと言ったと言う。

この後は劇や音楽会等の上演は一切禁止され、グリーの活動はこの演奏会を最後に停止せざるを得なくなった。戦争が敗色濃厚になるにつれグリーからも部員が戦線へと召集され、再び帰ることの出来なかった部員も多く、御霊安らかなれと祈るばかりである。こうして戦況は益々苛酷となり我が国は1945（昭和20）年8月15日終戦を迎えた。

7 井上良助：1943年高等学部高等商業科卒業。

8 『西南学院新聞』：第60号、1943年7月25日発行。

9 福永陽一郎：1944年中学部卒業、詳細は本文参照。

4. 戦後のグリークラブ（再興期）－石丸寛氏との出会い

学生たちも戦地から次々に戻り始めた1945（昭和20）年秋、グリークラブの部長をしていた藤井泰一郎¹⁰は、戦前グリーに所属していた石田昭¹¹と松本信義¹²の2人にグリー再興の話を持ち掛けた。2人は事の重大さに戸惑いながらも部員集めに奔走し、集まった8人と共に10月に再興グリーを立ち上げた。音楽の素養も無い新人たちは丸暗記で自分のパートの練習に励み、この年の暮のクリスマスコンサートで「権兵衛が種まく」「胸のただ中」の2曲を歌った。出来栄えなどは問題でなかった。厳しい練習に打ちひしがれながら再興1年目を終えたグリーに、翌1946（昭和21）年素晴らしい出会いが待っていた。それが石丸寛氏¹³との出会いである。

その頃石丸氏は両親の郷里の福岡に復員。美術を目指して福岡市に止宿し、「男声は西南OBに限る」というグリーOBの松本省一¹⁴が主宰するライラック合唱団で歌っていたが、このことが奇しくも西南グリーの指導をするという縁となった。石丸氏との出会いはグリーに飛躍的な合唱技術の向上をもたらし、1947（昭和22）年3月の第1回朝日合唱コンクールに優勝した。この時の自由曲は、石丸自身が採譜、編曲したロシア民謡「カチューシャ」であった。石丸氏は1948（昭和23）年までの2年間で、西南グリーに合唱の心技にわたる考え方や進むべき礎を築き上げた。正にグリー再興の恩人である。

アメリカ・南部バプテスト派宣教師A.グレイヴス¹⁵の詞に石丸寛氏が作曲した学院のカレッジソング「Ah, Seinan!」と「She Wants Brave, Noble Men」が生まれたのは1951（昭和26）年。この頃からグリーは全日本合唱コンクールの常連校として注目されるようになり、中断していた定期演奏会の再開は1952（昭和27）年のことである。

こうしてグリーは1959（昭和34）年8月、創立以来、初めて現役、OBが揃い、福

10 藤井泰一郎：1928年高等学部文科卒業。1931年西南学院中学部教員。その後、高等学部、専門学校、大学文商学部教授を経て第2代短期大学部長。

11 石田昭：1947年経済専門学校卒業。

12 松本信義：1948年経済専門学校卒業。

13 石丸寛：文化学院大学部芸術科卒業。指揮者、画家。福岡の合唱界育成に貢献。九州交響楽団結成、上京後指揮者として活躍、黛敏郎等と「題名のない音楽会」を立ち上げた。特に「5000人の第九」は有名。

14 松本省一：1941年高等学部高等商業科卒業。九州アマチュア合唱団のリーダー的存在。

15 A.グレイヴス（Alma O' Norean Graves）：アメリカ・南部バプテスト派宣教師、1938年高等学部教授。戦後1947年に復職、在任中はE.S.S.の学生にシェイクスピア劇（英語劇）を指導、1968年勲四等瑞宝章を受章。

永陽一郎を客演指揮者に迎え、「創立40周年記念演奏会」を電気ホールで開催した。当時のグリークラブの年間活動は、春の他大学合唱団との交歓演奏会、夏は西日本各地への演奏旅行と定期演奏会、秋は合唱コンクール、冬はクリスマスコンサートと極めて多忙で、日曜日だけが休みという極めてハードな体育会系のクラブにも負けない練習量の合唱団であった。

5. 合唱音楽の高みを目指して

1947（昭和22）年以来、参加してきた合唱コンクールは、全国制覇は出来なかったが1968（昭和43）年までに都立23回出場、3位内入賞は8回を数え「九州に西南あり」との高い評価を得ていた。しかし従来踏襲してきた年間スケジュールとメンバーの育成、そして何よりも定期演奏会の質の向上を図るためには、秋の2ヵ月をコンクールのためだけに割くことの不都合が問題となり、1970（昭和45）年合唱コンクール参加を取り止めることになった。

同様の動きは関東、関西の他大学グリーにおいても見られた。年間活動の集大成としての定期演奏会に、より一層完成度の高い音楽性を求めるために、西南グリーは中央から専門家の指揮者を招聘する道を選んだ。創立50周年記念演奏会から、80周年までの31年間にグリーが中央に求めた指揮者は6人で、この6人の指揮者による定期演奏会は実に28回に及んだ。特に福永陽一郎は19回、福永亡き後は関谷晋氏¹⁶に8回の指揮を務めていただき、より高度で充実した定期演奏会の維持にメンバーは努力を傾注した。

当時西南グリーは合唱界において、全国大学グリーの中でもトップ5に入るとの高い評価を得ていた時期である。この時期、国内の有力大学グリーは海外演奏旅行を開始、合唱熱の高まりと共にメンバー数も100~120人と大型化していった。

6. グリークラブの海外演奏旅行

西南グリーの海外演奏旅行は1965（昭和40）年8月の未だ米軍管理下にあった「沖縄戦跡慰問演奏旅行」に始まる。台風の余波の残る鹿児島港から船での沖縄遠征であった。そして1975（昭和50）年2月の第1回アメリカ演奏旅行以降、アメリカにはおよそ3年おきに6度の遠征を実現した。その間を縫って1983（昭和58）年7月には韓

16 関谷晋：1951年早稲田大学政経学部卒業。在学中に早稲田大学コールフリューゲル合唱団を設立。指揮者。

国、1985（昭和60）年7月には福永陽一郎引率のもと、早稲田大学グリークラブと共に「第7回ヨーロッパカンタータ」への参加を果たした。

春休みや夏休みの西日本一円の演奏旅行とは異なり、海外演奏旅行ともなれば演奏そのものは元より、メンバーの財政的な負担も大きく、都度グリーOBのみならず学院、大学、同窓会等を含め広範な支援が必要であった。幸いにも本学のアメリカにおける幅広い交流大学の協力や、海外同窓会支部、帰米された元本学の先生方のご助力をいただき、微力ながらも国際交流への貢献を果たし得たことは、グリーとして誇るべき活動であったと言える。

7. 福永陽一郎と西南グリー

福永陽一郎は戦前、西南学院中等部及び高等学部在籍。ピアノに長けていた所から1942（昭和17）年7月グリーの第8回、及び1943（昭和18）年7月の戦時体制下最後の第9回定期演奏会にピアノ伴奏者として出演している。また、同氏のご母堂福永津義氏¹⁷は1944（昭和19）年に開設された福岡保育専攻学校（現在の大学人間科学部児童教育学科）の初代校長を務め、永らく西南学院に奉職された。

福永陽一郎は、1948（昭和23）年東京音楽大学（現・東京芸大）ピアノ科に学びながら、東宝交響楽団（現・東京交響楽団）

で近衛秀麿に指揮法や作曲法を学んだ。1950（昭和25）年故あって帰福、西南学院大学神学部に入部と同時にグリークラブに入部した。1年程の在籍の後、1951（昭和26）年再上京し、後に「藤原歌劇団常任指揮者」を務めた。1953（昭和28）年には畑中良輔氏¹⁸とプロ男声合唱団「東京コリアーズ」を設立し、この頃「グリークラブアルバム」3部作を編纂するなどして合唱界の隆盛の基礎を作った。



晩年の福永陽一郎

17 福永津義：初代早緑子供の園園長、第8代舞鶴幼稚園園長、初代福岡保育専攻学校校長。

18 畑中良輔：1943年東京音楽学校声楽科卒業。声楽科、音楽教育者、音楽評論家、指揮者、日本芸術院会員。北九州市門司区出身。

合唱指導者としての福永と西南グリーとの本格的な関わりは、1959（昭和34）年のグリークラブ創立40周年記念演奏会の指揮であった。その5年後の1964（昭和39）年の第13回定期演奏会から、創立70周年記念の第38回定期演奏会までの25年間に、実に22回もの客演指揮者を務めた。

西南学院創立70周年に当たっての記念行事は、1986（昭和61）年5月9日から10日にかけて行われた。9日の記念式典は福岡国際センターで、2日目は福岡サンパレスにおいて記念音楽会が行われた。第1部はグリークラブや管弦楽団をはじめとして、大学の音楽系各部による演奏会。グリーは学院の記念すべきこの日のために「キリストの最後の7つの言葉」を福永の指揮で演奏した。第2部は午後6時半より、管弦楽団OB・OGオーケストラと、特別編成の教職員・学生及びOB・OGなど200人から成る混声合唱団によりヘンデルの「ハレルヤ」の大合唱を行った。指揮は福永陽一郎が務めた。

福永にとっては、前年の1985（昭和60）年7月は西南グリーを率いて3週間にわたりヨーロッパカンタータへの参加。1986（昭和61）年は5月の西南学院創立70周年記念音楽会や12月のグリー定期演奏会、そして翌1987（昭和62）年12月のグリー定期演奏会と、この3年間は西南学院と西南グリーに寄り添った期間であった。

福永陽一郎は、石丸寛氏と共に西南学院グリークラブの顧問でもあったが、実質的には常任指揮者であったと言える。「少年時代を過ごした福岡に来て西南グリーを指導することは、単に合唱専門家としての立場よりも、懐かしい福岡に帰る、西南学院に帰るといふ一種帰郷に似た気持ちでもあった」と氏は述べている。その気持ちが厳しい指導の中にも学生達との暖かい心の交流を生み、メンバー達から絶対の信頼を得、慕われた要因であろう。

1990（平成2）年2月、63歳の若さで逝去。死の前年12月の「グリークラブ創立70周年記念第38回定期演奏会」が、福永陽一郎の全ての音楽人生における最後の指揮舞台となったことも、西南との深い縁がもたらしたものと信じたい。

8. 福永陽一郎の音楽遺産

福永は生前家族に対して、「自分に万一のことがあった時には、音楽に関する資料類は全て西南学院に寄贈して欲しい」と伝えていたという。そして逝去後、福永の書斎がそのまま移されたかの如く、膨大な書籍や楽譜類が西南に寄贈された。このことは当時ニュースとして全国的に伝えられた。現在、寄贈されたこれらの遺産はグリークラブOB会によって整理途中であるが、福永が長年携わってきたオペラ関係の書籍

類や、ライフワークとして力を注いでいた、黒人霊歌に関する楽譜等は特に貴重である。またオーケストラや合唱指揮に用いた、福永直筆の朱書きの注記が入った多くの楽譜も興味深い。これらは福永陽一郎という音楽家を知るための一助にもなるであろう。

1950年代からの合唱隆盛の基礎を築いた「グリークラブアルバム」編纂に関しても、選曲段階におけるメモが残されているのは貴重である。何れにしてもこれらの資料を西南学院だけのものとはせず、出来る限り全国の合唱音楽愛好家と共有化したいと、グリークラブOB会ではその方法を模索し、リスト化やデジタル化を図るべく作業を急いでいる。

9. 西南グリーよ、永遠なれ

グリーのOBは1,200人を超えるが、卒業後も各地の合唱団で歌い、かつ指導者として活躍、地域の合唱活動を支えている。OB合唱団「西南シャントゥール」は結成から69年の歴史を有し、1984(昭和59)年から今日まで毎年欠かさず定期演奏会を開催している。全国の一般合唱団で、このように絶えることなく定期演奏会を継続しているのは、極めて稀である。このシャントゥールの存在が、現役グリー成長の大きな牽引力となっていることも忘れてはならない。

2000(平成12)年頃より全国的に大学合唱団における合唱離れの動きが起きた。社会の変化や価値観の多様化、趣味や娯楽の幅も広がるともに、音楽そのものもジャンルの多様化等諸々の理由は考えられるが、学生たちの意識の中に組織による拘束や上下関係を嫌う傾向が強くなったことは否めない。正規クラブ活動の部員数減少に比して同好会的サークルの加入者は飛躍的に増加傾向をみている。西南グリーにおいても毎年部員数の減少に歯止めがかからず、遂に2006(平成18)年部員数0となり2度目の休部の止む無きに至った。

本来グリーとは音楽的には「無伴奏の男声合唱」を指し、グリークラブとは無伴奏の男声四部合唱で、キリスト教系大学の合唱団として宗教曲を歌う事が条件とされていたという。西南学院グリークラブは、これらの条件を完全に具備した合唱団であり、単に愛好者による部活動に留まらず、西南学院にとっても欠くことの出来ない学内組織の一つであるともいえよう。

幸いにも西南グリーは2008(平成20)年4月再復活はしたが、2022(令和4)年現在、スケール面でも技術面でも未だに再興途上の域を脱し得ない厳しい状況にある。西南グリーの100年を超える歴史と伝統を絶やすことなく未来へ向けて繋ぎ、西南学院にいつまでも讃美の歌声が響くことを願って止まない。